『北海道民族学』20号刊行に寄せて

会長　平田　昌弘

北海道民族学会は 1981 年に設立されました。後に第 5 代会長になる岡田淳子先生のご尽力で、『通信』が創刊されたのが 1985 年のことです。『通信』は、学会の活動記録を報告するだけでなく、研究会での発表要旨を掲載し、会員の精力的な学術活動を伝えています。活動記録を残すと共に、北海道の地から会員の刺激的な学術成果を広く発信するための礎が造られたのです。この『通信』に、査読審査を経た投稿論文・研究ノートを掲載し、雑誌は学会誌『北海道民族学会会報』として発展していきます。2005 年が創刊号となります。翌年の第 2 号では、第 6 代会長の津曲敏郎先生のご尽力により、世界からデータベース検索が可能となる国際標準逐次刊行物番号（ISSN）に登録した上で、『北海道民族学』と改名していきます。学会の顔としての学術雑誌がここに整います。以後、民族学、民俗学、文化人類学、考古学、言語学、音楽学などを中心とした創造性溢れる論文を掲載し続け、今回の第 20 号に至ります。『北海道民族学』は、北海道から広く学術性成果を発信する役目を果たしてきたかと思います。

2021 年 8 月より平田が編集委員長になったことをきっかけに、新しい編集体制をつくりました。新しい編集体制を発足するにあたって注力したことは、1）編集委員の負担軽減、2）編集委員内部での情報の透明性と共有性、3）数年単位で編集委員を交代していけるシステムづくりでした。これは、編集委員に過度な負担が長期にわたってかかり過ぎることを避け、学術性の高い学会誌が今後も継続して刊行されることを意図しての改革でした。この編集体制で新しく導入したのが査読担当制でした。投稿論文に対して、査読の間を取り持つ担当者を決め、査読が終わるまで、著者と並走し、より良き論文になるよう責任を持って担当するという制度です。査読者からのコメントは示唆に富み、著者が査読の過程で大いに学び、学術的に発展していく様子が編集委員会側にも伝わってきます。著者は、新しい視点、新しい学説、新しい試みに満ちた主張を展開しようと、挑戦的な姿勢を崩さず、応答します。査読担当にあたる編集委員との協力で、示唆に富んだ論文を掲載続けられており、今後もこの制度を継続していきたいと考えています。

一方、北海道民族学会は多様な研究分野の同志が集まり、互いに研鑽を積み、その成果を広く発表する媒体として『北海道民族学』があります。高い学術性を求めるあまり、窓口の狭い、投稿しにくい媒体となっては、本来の意義を失ってしまいます。学術性を担保しつつ、自由で豊かな思想を発表できる場として、今後とも『北海道民族学』があり続けて欲しいと願うばかりです。枡谷隆男さんが第 12 号で述べられているように、「柔らかい」雰囲気を持ち続け、会員間の親睦を深めながら、学会誌が引き続き楽しく有意義に刊行されていくことを祈念しています。

（ひらた・まさひろ／帯広畜産大学）